

続中・上級日本語学習者の漢字表記上の問題について

深見兼孝

はじめに

本小稿は、中・上級日本語学習者が日本語を漢字かな混じりで表記したときの、送り仮名を含む漢字表記上の誤りについて、「誤りの型」の観点からその分布状態と個々の実例を調べ、留学生に対する漢字教育に示唆を与えようとしたものである。

1. 問題と方法

留学生に対する漢字教育の改善について考える際、「どのような型の誤りが犯されやすいか」を調査し明らかにするのは一つの有効な手段であろう。そして、そのような調査には考慮すべき点が2つあって、どちらを考慮するかによって調査の方法全般が変わってこよう。すなわち、ひとつは「誤りの型」の個人差ないしは（そういうものが考えられたとして）グループ差で、もう一つは「誤りの型」の時間的な変動である。

まず、個人差ないしはグループ差を考慮に入れた「誤りの分析」の例は寡聞にして知らない。ここで言う個人差ないしはグループ差とは、被験者間の比較的大きな日本語能力の違いに由来する差や、漢字系か非漢字系かに由来する差のことではない。日本語能力についてお互い余り差のない学習者を対象に、犯しやすい「誤りの型」に個人的な差（「偏り」と言ってもいい）があるかどうか、もしくはそれを基に学習者の類別が可能かどうかを念頭においた研究のことである。このような個人間ないしはグループ間の差は、いったんは「ある」と仮定する方が、はじめから「ない」と仮定するよりも、おそらく都合がよいであろう。実際に教室で指導する場合のことを考えれば、通常クラスは能力別に編成されるので1クラス内の学生の日本語能力の差は比較的小さいと見ていいし、一方できめ細かい指導には個人差を配慮した指導が必要である。したがって、現場のことを考えれば、「誤りの型」について個人差ないしはグループ差があると仮定し、その証明と同時にその内容を明らかにする方向で研究を進めるのが望ましいであろう。

次に、「誤りの型」の時間的な変動とは、現実的には日本語能力の一側面としての漢字能力の発達に伴う、それぞれの「誤りの型」に分類される誤りの量的な変動と読み替えてもいいただろう。すでに、初級者とそうでない者の間には漢字の認識のしかたに差があるということが明らかにされているが¹⁾、一般的に漢字能力の著しい伸び期待されている中・上級の段階²⁾では「誤りの型」の時間的な変動はどうなっているのだろうか。また、そ

こに上で述べた個人差やグループ差の存在を仮定したとき、個人について時間の流れに沿った調査が必要であることは言うまでもないだろう。

さて、このような2つの事柄を念頭において調査をするとすれば、その調査は統計的処理を行うことを前提とすることになるだろう。とすれば、そのサンプルは量的にある程度の物でなければならない。しかしながら、自分の担当するクラスの授業の中で資料を得るしかない筆者としては、このような調査は特別なプロジェクトでも組まない限り不可能である。そこで、今回は「誤りの型」について数人からデータを抽出し、①全体にみられる傾向を中・上級者の「誤りの一傾向とみなし、同時に②「誤りの型」についての個人的な偏りを記述して、漢字教育の今後のあり方に示唆を与えるにとどめたい。なお、先に述べた理由により、時間の流れに沿った調査は行わなかった。誤りの分類法については深見（1992）を踏襲するが、誤りの起こった場所についてはそこで触れたので、データ上では無視した。データ抽出の原則は次のようにした：

- ・ 誤りの回数は個人毎に数える。
- ・ 同一の誤りの型内での同一の漢字（音読みの場合と訓読みの場合は別の漢字として扱う）の誤りは1回に数える。
- ・ 以上のようにして得た誤りの回数を「誤り数」の値とし、データとして使用する。

2. 資料

1991年度後期、1992年度前期筆者が担当した日本語上級の1クラスで使った「ニュースで学ぶ日本語（堀歌子他著、凡人社1987年）」の「聞き取り（第12課～第37課）」の部分を学生に完成させた（答え合わせを済ませた）後、その全文を漢字かな混じり文に直させ、例解を示した上で、家で書き直して来させたものを原資料とし、その中から1年を通して授業に出席し、かつ同一人物のものとは判断できるもの10名分を実際の資料とした³⁾。「聞き取り」は、テープを聞いて下線部を仮名とアラビア数字を使って埋め、スク립トを完成させるようになったものである。漢字かな混じり文にさせる際、辞書を引いたり、語句の意味について質問をしてもいいことにした。なお、難しいと思われる地名、人名についてはこちらから漢字を与えた。

3. データ

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	小計
(1) 字形の誤り											
① 構成素の誤り											
-1 欠落	1		1	1							3
-2 存在しない形									1		1
-3 組合わせの誤り		1				1			3		5
-4 過剰								1	1		2
*-5 バランス	1							1	1		3
② ーに関する誤り											
-1 欠落				1							1
-2 過剰		1									1
③ に関する誤り											
-1 欠落										1	1
-2 過剰											-
④ ノに関する誤り											
-1 欠落											-
*-2 方向	1										1
⑤ 、に関する誤り											
-1 欠落	1					1					2
*-2 過剰	1					1					2
⑥ 長さの誤り											-
⑦ 複合							2		2		4
小計	5	2	1	2	-	5	-	4	6	1	26
(2) 音の誤り											
① 適字とは構成素が異なる											
-1 適字に足りない				1		1			2		4
-2 適字と組合せが違う	2		1		1		1		5	2	12
-3 適字より多い						2					2
② 適字とは交わりが異なる								1			1
*③ ーについて異なる											
-1 適字に足りない	1										1
④ 適字とはいくつかの要素で異なる											-
⑤ その他	3					1	1	2	2		9
小計	6	-	1	1	1	4	2	3	9	2	29
(3) 字義の誤り											
① 適字とは構成素が異なる											
-1 適字より少ない	1										1
-2 組合せが違う	1						2				3
-3 適字より多い				1							1
② その他	6	1		1		3	2	3	3	1	20
小計	8	1	-	2	-	3	4	3	3	1	25
(4) 送り仮名の誤り											
① 不足	2										2
② 過剰				1		1		1			3
小計	2	-	-	1	-	1	-	1	-	-	5
*⑤ その他	1					1					2
合計	22	3	2	6	2	13	6	11	18	4	87

- ・ A～Jは学生。
- ・ *は今回新たに出現した型⁰。
- ・ Hからはコピーが不鮮明のため分類不可能な例1つを除外。
- ・ 「適字」は「実在しかつ適切に用いられるべき漢字」の意。

4. 考 察

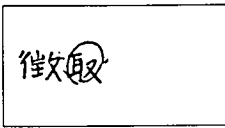
「誤りの型」は大ざっぱに(1)字形の誤り(実在しない)、(2)音の誤り(実在するが読みが違う)、(3)字義の誤り(実在し読みも同じだが、意味が違う)、(4)送り仮名の誤りの4つにまとめられる⁹⁾。それぞれの誤り数は26、29、25、5で、(4)「送り仮名の誤り」が他に比べ非常に少ないのが目につく。また、この誤りを犯した者は4名で、他の誤りが8名または9名であるのに比べるとやはり少ない。少なくとも中・上級者の一部にあっては、送り仮名をどう送るかよりも漢字を正しく書いたり適切に使ったりするほうがはるかに難しいのであろう。

(1)から(3)までの誤り数はほぼ同数である。少なくとも中・上級者は全般的に「うそ字」を書く傾向が少ないとは言えない。しかし、次のようなことはこれまでの研究結果⁹⁾と合致する傾向である。まず、(1)から(3)まで必ず「構成素」に関わる誤り(各項の①)が含まれている。次に(3)を除いて「構成素」関わる誤りが半数以上を占める。(1)では26のうち14、(2)では29のうち18が「構成素」に関わる誤りである。特に(2)、(3)に比べ(1)では「誤りの型」が多いだけに、注目に値する。さらに、「構成素」に関わる誤りは(3)を除いてほぼ全員が犯している。すなわち、ここに選んだ10名は漢字がいくつかの部分から成ることを認識しているのであり、それは進んだ段階の日本語学習者にみられる一般的な傾向なのである。

ところで、(1)においても(2)においても、「構成素」に関わる誤りは、必要な「構成素」を落とすか(各一1)、本来あるべき「構成素」と異なる「構成素」との組合せ(それぞれ一3と一2)によるものが多い。これは彼らが、漢字の構成に注目するとき、よく注目する部分とそうでない部分がある反面、しかるべき「構成素」の選択ができるかどうかは別にして、漢字が単に「構成素」から成るということだけではなく、いくつかの「構成素」でどのように組み合わされて成り立っているかを知っていることの反映であるようにも思える。これも中・上級者に見られる特徴の一つである可能性として取り上げておこう。

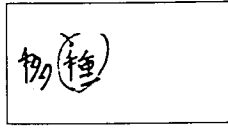
(2)と(3)の「その他」を取り上げる。いずれも適字との差を字画に帰することができないものである。(2)⑤の「その他」は誤り数9で、半数の者がこの誤りを犯している。これは語形の把握ができなかったのが誤りの原因であるが、9例のうち8例までは適字と読みの上で似ているという印象を受ける。また、Fの(2)①-1の誤りも適字との読みの上での類似性を感じさせる例(例8)でもある。以下はそれらの例である。

例1



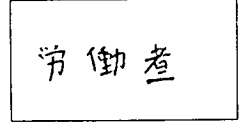
徴収

例2



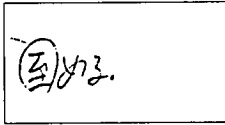
移植

例3



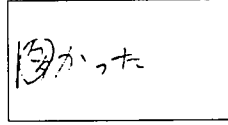
労働者

例4



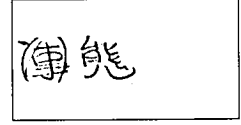
占める

例5



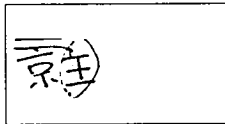
大きかった

例6



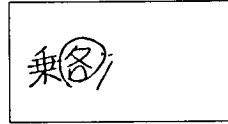
実態

例7



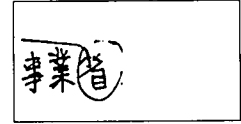
京葉

例8



客

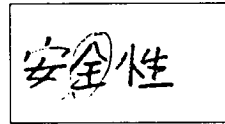
例9



事業所

これらのうち、例1、2、3、6、9は語形が捉えられていないにもかかわらず、なんとか意味を通じさせようとした結果である可能性⁷⁾があり、興味深い。また、例5と次の例10は文脈上不整合⁸⁾を起こさないの、誤りであることに気が付かなかった可能性がある。

例10

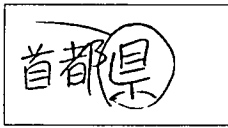


安定性

もしこれが正しい推測であるなら、彼らは漢字の選択にその意味や文脈を利用していることになり、中・上級の学習者の一つの特徴であると言ってもいいであろう。

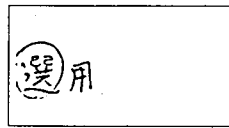
(3)②の「その他」の誤りは(3)の誤り数25のうち20も占め(全誤り総数87の4分の1弱)、8名の者がこれを犯している。また、(3)で「構成素」に関する誤りを犯さなかった者7名のうち5名がこの誤りを免れていない。もし、読みが同じ漢字どうしは読みが異なる漢字どうしより、字形の差を字画(「構成素」も究極的にはここに入る)の差に求められる確率が低いのが(日本語の)漢字の一般的な性質ならば、このような現象の原因をそこに求めることもできるが、これについては今の所なんとも言えない。いま言えるのは、このタイプの誤りは中・上級者に比較的好く見られるタイプの誤りである可能性がある、ということである。ところで、ここに属す誤りのほとんどから問題の10名は誤って用いられた漢字の意味を(辞書を引いたかどうかは別にして、また精度は別にして)知っているという印象を受ける。以下その例を全て挙げる(2名以上に共通しているものはダブリを省く)。

例11



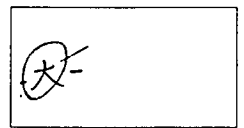
首都圏

例12



専用

例13



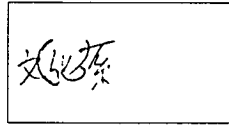
第一

例14



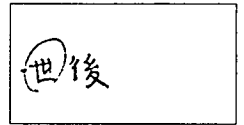
利用

例15



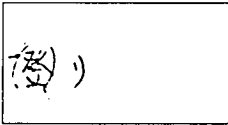
文科系

例16



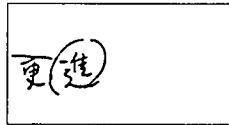
世後

例17



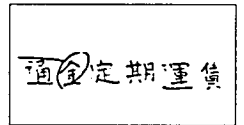
上り

例18



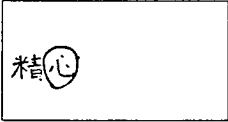
更新

例19



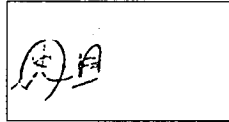
通勤定期運賃

例20



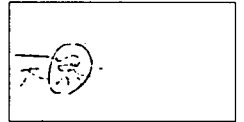
精神

例21



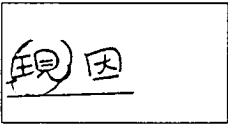
注目

例22



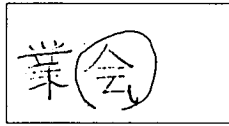
大会

例23



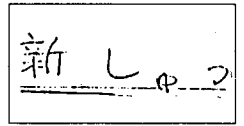
原因

例24



業界

例25



進出

これらのうち、全くナンセンスな漢字の使い方をしているのは、筆者には例13、14、21（と23?）がそうだと感じられる。例19は“通金”ではナンセンスであろうが「運賃」に引かれた可能性がある。また、例15は大学での大まかな専攻の類別のことであるが日本人もうっかりやりそうな誤りであり、例17は数字が問題で多義語の書き分けの誤りである。このように、彼らは漢字に意味があること、そしてそれを利用して漢字表記を行うことを知っており、これは彼らだけではなく、進んだ段階の学習者の特徴であると推測される。

個人差について述べる。印象的なのはIが(1)と(2)において①、すなわち「構成素」に関わる誤りを多く犯していることである。(1)では全てそれ、(2)では9個のうち7個までがそれである。その一方で、(1)においてAとFが比較的多くの型の誤りを犯しているようにも見える（Aは(2)でも同じような傾向を見せている）。いずれも数値自体が小さいので、数字のトリックの可能性もあるが、学習者によって「構成素」に関わる誤りを集中的に犯す者と、広く字画に関わる誤りを犯す者がいるという可能性を否定するには至らないだろう。

5. 漢字教育への示唆

これまで述べてきた可能性や推測が正しいと仮定すれば、次のような示唆が得られる。

- ① 中・上級者といえども字形の指導はおろそかにすべきではない。一般的には漢字が「構成素」から成るということが認識されているが、学習者によっては1画1画についても指導を要する場合がある。「構成素」を利用した指導は中・上級の段階でよく行われているが、それが中・上級者の誰にでも適切か検討を要するだろう。また、「構成素」を利用した指導では、一般には「部首」が利用されているようであるが、それが適切かどうか検討されなければならない。そのためには、学習者が何を「構成素」として認識しており、どのような「構成素」がどこに用いられているときに誤りを犯しやすいかを調査する必要があるだろう。
- ② 漢字の指導は語彙の指導でもあるべきである。特に正しい語形の把握は不可欠である。漢字の指導の際、語形の把握が先行するような工夫があってもいい。
- ③ 中・上級者は漢字に意味があること、精度は別にしてもその意味が何であるかを知っている（または知ることができる）ので、それをさらに刺激、精度を上げるようなプログラムが漢字教育の中に組み込まれてしかるべきである。頭から記憶させるやり方だけでは、時間的にはもちろん、このような中・上級者の特徴からいっても効果が期待できるか疑問である。

おわりに

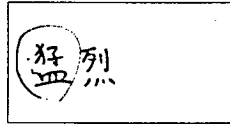
以上、日本語学習者の漢字表記に関わる誤りの実例並びに分布状態の検討を通して、漢字教育に示唆するところを述べた。再三言っているように、データがきわめて小規模なので、これらの示唆は可能性と推測の上に立たざるをえなかった。3節で述べたように、データは学習者が自己チェックを行った資料から抽出したものであり、ここで取り上げた誤りはそのチェックにかからなかったものではあるが、今後検証が必要である。

注1. 松尾（1992）参照。

2. しかしながら、正確に言えば、上級になればなるほど「分かる漢字」と「書ける漢字」の区別が設けられるのが通常であり、特に特定目的のための日本語教育（JSP）においては、この区別は不可欠であると思われる。したがって、このような区別を前提とした上は、漢字能力の様々な側面についてその伸長に対し期待度に差が出るのは当然である。また、それらの個々の側面について「誤りの型」の時間的な変動を問題にすることも考えられよう。
3. 原資料に名前を書くよう指示していなかったのである。

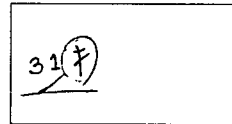
4. (5)以外は実例を一つずつ挙げる。各例の枠の下は、本来用いられるべき適字、漢字熟語、送り仮名を示す。(5)は、広義には(2)に属するものだが、漢字熟語に関わるもので筆者はそのような誤りの型を想定していなかったもので、とりあえず「その他」に分類しておいた。これには2つがあったが、例示するにとどめたい。ひとつ(左)は、適切な漢字が使用されているのだがその順序が違い実在しない熟語になっているもの、もう一つ(右)は、2個まではその熟語を構成する漢字を含んでいるが全体として別の語(後援会)になってしまったものである。

(1) ①-5



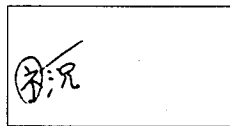
猛烈

(1) ④-2



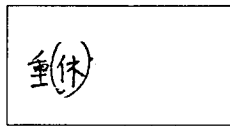
31才

(1) ⑤-2



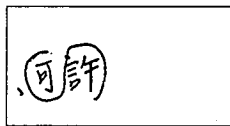
不況

(2) ③-1

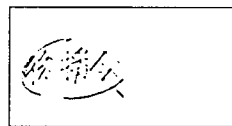


体

(5)



許可



後援会

5. (5)については注4 参照。

6. 注1 参照。

7. 例3、6、9の適字を含む漢字熟語はそれぞれ次のような文脈で用いられている：

(例3) 労働省への届出や許可

(例6) 生活実態

(例9) 2362の事業所が派遣業への名乗りを

8. 例5、10の適字(を含む漢字熟語)はそれぞれ次のような文脈で用いられている：

(例5) 期待が大きかった

(例10) 安定性が見直された

言及した文献

深見兼孝（1992）中・上級日本語学習者の漢字表記上の問題について「広島大学留学生センター紀要」第2号 pp.23-33

松尾 馨（1992）非漢字圏日本語学習者の漢字形態認知 平成3年度広島大学大学院教育学研究科修士論文